

# はじめに

2020年の東京オリンピック・パラリンピックを控えて、日本社会の多言語化が進められています。また、日本は「観光立国」を目指し、2020年には4000万人、2030年には6000万人の訪日観光客数を目標としています。そして、コンビニや飲食店などの外国人の店員さんをはじめ、学校の友人として、地域の隣人として、職場の同僚として、文化的背景が異なる人たちを身近に感じ、ともに暮らしていくことは日常になりました。

一方、こうした日本社会の国際化・多文化化の流れとは裏腹に、一見平和に見えるこの社会には、一皮めくると、民族や国籍の違う人たちに対するヘイトスピーチ・ヘイトクライムなどの現象が現われます。また、家庭の中や仲間内の軽い冗談のようなかたちで、「お茶の間での差別発言」「カジュアルなレイシズム」などと呼ばれるような現象が、不意に出現してしまうこともあります。ユネスコ憲章の前文には、「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」とありますが、このように小さな、無意識の悪意もまた、この社会を戦争に進ませる「小さな芽」と言えるかもしれません。そしてその「芽」は、大きなものも小さなものも、日本だけでなく世界中に存在してしまうのです。

本書の執筆者は、全員が「日本語教師」であり、日本語を母語としない人たちへの日本語教育を専門の一つとしています。日本社会のマイノリティである外国人学習者と日々接していて、彼らが往々にしてもつ被差別感や疎外感が痛切に伝わってくることがあります。一方で、日本語学習者たちの中にも、民族や宗教が違う人びとに対する先入観だけでなく、障がいをもつ人、性的指向が自分とは違う人、経済的に恵まれない人などに対するあからさまな偏見があると感じる瞬間があります。

自分とは違う価値観をもつ人びとや、あまりなじみのない環境から来た人びとのことを、こわいと思ったり避けたいと思ったりするのは、本能的なことかもしれません。また、自分のいる環境にあまりにもストレスが多いとき、自分よりも立場が「弱い」人がいると思うことによって、安心したり気持ち楽になったりするという、悲しい側面がわたしたち人間にはあるのかもしれません。だから、だれもが「差別や偏見は悪い」とわかっていながら、それがこの世界から今もなくならないのかもしれません。

しかし、だからと言って、「どこにでもあることだからしかたがない」「それが世の常だから」と、あきらめて思考停止してもいいでしょうか。たとえば、その矛先が、自分や自分の家族や身近の大切な人たちに向けられたものであったとき、「しかたがない」とあきらめることができるでしょうか。

わたしたちは、そのままではいけないと考えました。上で見たような社会の分断と対立を、暴力ではなく「対話」によって解決していこうとする意欲と、そのために必要な最低限の知識

と、さらに多様性を受容するためのスキルトレーニングが必要だと考えました。そして、わたしたちが関係する教育の現場こそ、公正な社会を創っていく市民としてのトレーニングの場にふさわしいと考え、そうした場にしたいと願いました。

したがって本書では、さまざまなバックグラウンドをもつ人びとがすでに一緒に生きるこの社会で、以下のようなトピックについて、仲間と考えを伝え合いながら理解を深め、あらためて「多様性」について考えるワークをそろえました。

第1部は、自分の「あたりまえさ」や「常識」が、他の人びとにとってはそうではない可能性があることに気づいていく活動です。そして、それぞれの文化や価値観への寛容と同時に、「みんな違ってみんないい」という考えの落とし穴についても考えます。

第2部では、社会にある差別や偏見について、直接考えていきます。自分が標的になるまで理不尽さを認識できない無関心さを克服し、「もし自分だったら」という想像力をもち、生活の具体的な場面での行動につなげていくことができるようなワークです。

第3部は、言語の平等性について考えます。英語をはじめとした特権的な言語が伝搬する構造を理解したうえで、すべての言語は平等だという認識について考えていきます。複雑な言語環境下で育つ子どもの言語習得、「やさしい日本語」、手話、複言語主義、方言などについて、理解を深めていきます。

そして、第4部では、あたたかい教室風土をつくり対話を促すアイスブレイクやゲーム、ワークを紹介します。使用可能なすべての方法を用いてコミュニケーションしようとする意欲とスキルを伸ばし、視線や態度を含め熱心に聞く力、相手の言語能力に合わせて自身の能力を調整できるスキルを楽しみながら身につけます。

本書は、異文化間教育や多文化共生論などの科目のテキストとして使っていただくことを目指しています。執筆者全員が日本語教育／言語教育にかかわっているので、日本語教員養成、地域日本語支援活動、あるいは英語教員を含む外国語教員養成のためのクラスでの使用も想定しています。日本語クラス(上級かと思いますが)や、中学生や高校生向けの副教材としても使えるでしょう。また、国際交流や多文化主義、複言語複文化主義に関心をもつ市民や、その研修・生涯教育を担当する方にも活用していただけたらと思います。外国籍住民とかかわる機会の多い自治体職員、外国人介護福祉士・看護師を受け入れている病院や施設の関係者、海外ルーツの子どもを受け入れている教育機関関係者の皆さんにも、使っていただけることを願います。

盛り込んだトピックは多岐にわたり、社会全体を広く鳥瞰的に理解すること、そして「ワークブック」として学習者の皆さんに主体的に考え検討し考えつづけてもらうことを、重視しました。そのことは一方で、本書で示したごく基本的な情報で、まずは関心や興味をひき、さらなる知識や情報を今後は学習者の皆さんに主体的に獲得していってもらう、その契機となることを企図しています。先生方には、Web上の「授業実践のヒント(教師用参考資料)」も合わせてご使用いただきたいと思います。

そして、強くお伝えしておきたいことは、当然のことながらわたしたち6人の執筆者全員に、それぞれの思想や価値観があり、それ自体も「うのみ」にせず議論の俎上のものとしてほしいということです。本書では、上述のとおり、学習者の皆さんに「考えて」「検討して」「考えつづけて」もらう契機になることが当面の目的です。したがって、断定的な知識の押しつけをできるだけ避け、学習者の皆さんの主体的な思考を促すような工夫をしながら執筆してきました。けれども、そこにはやはりわたしたち執筆者の思想や価値観が間違いなく反映しています。ですので、本書を使っていく中で、ご自分の体験や生活感覚の中で気づいた具体的な反論や「ちょっと違う」と思う点を、ぜひクラスの仲間とともに議論してほしいと願っています。

最後に、本書を出版するにあたって、ご助言、ご協力をいただいたすべての方に、この場を借りて厚くお礼を申し上げます。そして、本書を世に送り出してくださった、研究社の濱倉直子さん、津田正さんに、心からの感謝のことばを申し上げます。

2018年11月

編著者一同



# 目次

はじめに..... iii

## 第1部 異なりを考える ..... 1

- 第1章 郷に入っては郷に従え？ ―異文化間ソーシャルスキル― ..... 2
- 第2章 心が広がってどういうこと？ ―寛容性― ..... 8
- 第3章 言いにくいことをどう伝える？ ―アサーション・トレーニング― ..... 16
- 第4章 えっ？ あなたはこう思わないの？ ―ビジネスでの異文化接触― ..... 26
- 第5章 「〇〇人」ってだれのこと？ ―「日本人」・「外国人」― ..... 33
- 第6章 あなたにとっての「カミ」とは？ ―宗教観― ..... 41

## 第2部 差別とその感情を考える ..... 49

- 第7章 悪気はなかったんだけど... ―マイクロ・アグレッション― ..... 50
- 第8章 今のあなたはどのような立場？ ―マイノリティとマジョリティー― ..... 56
- 第9章 みんなが暮らしやすく！ ―ユニバーサルデザイン― ..... 62
- 第10章 自分の家の近くはだめ？ ―沖繩― ..... 70
- 第11章 ひとくくりはあぶない！ ―ステレオタイプ― ..... 76
- 第12章 国って愛さなきゃいけないの？ ―ナショナリズム― ..... 83

## 第3部 言語間の平等を考える ..... 91

- 第13章 「ことばができる」ってどんなこと？ ―国境を越える子どもの言語習得― ..... 92
- 第14章 わかりやすく伝えよう！ ―やさしい日本語― ..... 100
- 第15章 にぎやかな、音を使わない言語 ―手話― ..... 107
- 第16章 英語だけでいいですか？ ―英語一極集中の功罪― ..... 114
- 第17章 いくつもの言語とともに ―複言語主義― ..... 120
- 第18章 軍隊を持つ方言って？ ―言語バリエーション― ..... 126

第4部

ミニワーク -ちょっとした気づきのために- 135

1 アイスブレイク -氷を溶かそう！- 137

1-1 増える自己紹介 138

1-2 あなたはどっち派？ 139

1-3 仲間を探そう 140

1-4 聞こう話そう 141

2 ダイバーシティに気づこう！ 143

2-1 いろいろなあいさつ 144

2-2 プレゼントゲーム 145

2-3 わたしの大切 146

2-4 食品ピクトグラム 148

2-5 タイムゲーム 150

3 自分の価値観を客観視しよう！ 151

3-1 ○○らしさ 152

3-2 学校の先生になろう 154

3-3 代表選考委員会 156

3-4 常識ってなんだろう？ 159

3-5 「中立的なことば」って何？ 160

索引 165

編著者紹介 166

第 1 部

異なりを考える

## 郷に入っては郷に従え？

## 異文化間ソーシャルスキル

## ●ウォーミングアップ 1

1. 次のうち、あなたがふだんしていること、心がけていることに○をつけてください。  
(Aの欄に書きましょう)

|   | A | B |
|---|---|---|
| ① 自己紹介の場面では、名前や所属先などを簡潔に、少しあらたまった態度で話す。     |   |   |
| ② 初対面の人と話すときは、自分の話をするより、相手について質問する。         |   |   |
| ③ 授業中、教師から指名されたときには答えるが、自分から手を挙げて発言はしない。    |   |   |
| ④ 購入後少し時間が経った商品に不具合が見つかった場合、特に何もしない。        |   |   |
| ⑤ 困ったことやわからないことがあるとき、なんとか自分の力で解決しようとする。     |   |   |
| ⑥ インフォーマルな場面の自己紹介では特に、ジョークを交えて印象づける。        |   |   |
| ⑦ 初対面の人と話すときは、相手について質問するより、自分の話をして自己開示する。   |   |   |
| ⑧ 授業中、意見や反論があるときは、自分から手を挙げて発言する。            |   |   |
| ⑨ 購入後少し時間が経った商品に不具合が見つかった場合、店に交渉して交換してもらおう。 |   |   |
| ⑩ 困ったことやわからないことがあるとき、上司や教師に積極的に相談する。        |   |   |

2. 同じ項目で、海外や異なる文化圏など、違う環境へ行ったときに気をつけることに○をつけてください。(Bの欄に書きましょう)
3. AとBで○がついた箇所は同じでしたか、違いましたか。どこが変わりましたか。  
同じ / 違う  
 [違った場合、変わった箇所] \_\_\_\_\_
4. 3で「違った」と答えた人は、なぜ変わっているのでしょうか。考えたあとにグループで話し合ひましょう。
- \_\_\_\_\_
- \_\_\_\_\_



「ソーシャルスキル」ということばは、多くの研究者によってさまざまな定義がなされていますが、佐藤・相川(2005)は、「対人関係の目標を達成するために、言語的・非言語的な対人行動を適切かつ効果的に実行する能力」と言っています。たとえばコミュニケーションの相手の表情から感情を読み取ること、人の話に途中で割り込まず最後まで聞くこと、自分の感情をコントロールしながらことばや態度を選び反応することなど、ことば、動作、ふるまいなどを含めた、人づきあいの方法です。これを知って使うことができれば、人とある程度適切に、また効果的に関係が築けると考えられます。

## ●ウォーミングアップ 2

1. 「日本語がおじょうずですね」と外国人留学生をほめたら、その人が「ええ。毎日勉強していますから、じょうずになりました」と答えた場合、あなたは違和感を覚えますか。  
違和感を覚える / 覚えない
2. 外国人の友だちがあなたの家で、何も言わずに勝手に冷蔵庫を開けてジュースを飲んだとします。あなたはどのように感じますか。

---



---

さて、上で紹介したソーシャルスキルですが、どこの社会や文化でも同じものがよしとされるのでしょうか。

おそらく日本に住んでいる皆さんの多くは、●ウォーミングアップ 1 の1では、①～⑤に○をつけたのではないのでしょうか。一方、⑥～⑩は、「アメリカの文化や社会で期待されるような人付き合いの要領」のスキルとして挙げられています(高濱・田中 2012)。

●ウォーミングアップ 2 の1のようにほめられたとき、日本人は「いえいえ、まだまだです」と謙遜する人が多いのではないのでしょうか。冷蔵庫の例はどうでしょう。日本だと、友だちでも冷蔵庫は勝手に開けない、という人が多いようですが、「友だちならば当然、持っている物を分け合うのが普通で、いちいち許可を取るほうが他人行儀で寂しい」と感じる文化もあります。

人はひとりひとり性格も考え方も好みも違うものですが、社会や文化をおおまかに分けると、それぞれに期待されるソーシャルスキルがあることがわかってきました。そこで、ある文化圏では人とつきあう際にどのような行動やコミュニケーションがよいとされているのかという、「異文化間ソーシャルスキル」の学習が役立つわけです。

## ●考えましょう 1

1. 次のうち、海外で生活していた高校生が日本に帰国したあと、やめた習慣(A)、新しく身につけた習慣(B)はどれでしょうか。(参考：中西 1989)

- ①「ごめんね」とすぐに謝る [ A / B ]
- ②人の目を見て話す [ A / B ]
- ③レディファースト [ A / B ]
- ④トイレに集団で行く [ A / B ]
- ⑤(女の子が)男の子をファーストネーム(名字でなく名前)で呼ぶ [ A / B ]
- ⑥何でも急いでする。速く歩く。 [ A / B ]
- ⑦質問をする。不満を訴える。 [ A / B ]

2. 次の設問について考えてみてください。

① 高校生がこのように習慣を変えたのは、どのような理由からでしょうか。

---



---

② あなたはこの結果をどう思いますか。

---



---

③ 異文化圏などでソーシャルスキルの違いを感じたことがなかったか、思い出してみましょう。

---



---

3. 書き終わったら、ペアやグループで意見を交換しましょう。

## ●考えましょう 2

あなたの所属グループに外国人が入ってきました。その人は、次のような主張をしています。



- ・わたしは日本語が全くわからないので、できるだけ英語で話してください。
- ・皆さんは制服を着ていますが、わたしの服装は自由にしてほしいです。
- ・それから、なにか作業をするときには、グループやメンバーで協力するのではなく、役割を明確に分け、各自が自分の担当のみに力を入れるべきではないでしょうか。

これに対し、2つの意見が出てきました。

確かにわれわれもグローバルな考え方に変わらなければいけない！これを機に日本人も日本語を使わず、英語を使うルールにしよう。制服はやめて、私服に変えよう。すべての作業を分担制にして、それぞれの役割に責任をもつようにしよう。



A

「郷に入っては郷に従え」ということばのとおり、ここで活動する以上はだれでもルールを守るべきだ。今までの規則ややり方は変えず、彼／彼女には日本語をしっかり勉強してもらうことにしよう。



B

1. あなたはA、Bどちらの意見を支持しますか。あるいは違う考えですか。それはどのような理由からですか。

A / B / [違う考え]

[理由]

2. 「郷に入っては郷に従え」ということばについて、そのとおりだと思った経験がありますか。あるいはそのような考えはおかしいと思った経験がありますか。どのような経験ですか。

[経験の内容]

[そう思った理由]

3. 書き終わったら、グループで意見を共有しましょう。

異文化間ソーシャルスキルを知り、身につけておくことは、異なる文化に行った際、対人関係での衝突を防ぐ手立てになり、良好な人間関係を築くことにも役立ちます。ですがたして、少数派(新参・被征服者)が多数派(古参・征服者)に合わせることだけが正しいのでしょうか。たとえば日本に暮らす外国人は、日本人と同じようにふるまい、「日本人」と同じになることが目標なのでしょうか。ここで、さまざまな文化をもつ人びとが共に生きていくという考え方について確認しておきましょう。

岡本(2010)の分類では、移民や少数民族が、多数派社会の言語や文化的価値を受け入れるとともに、みずからの文化・言語を失っていく過程を「**同化**(assimilation)」と言っています。それに対し、移民、外国人、少数民族も含めて諸集団の文化、言語、価値観などを対等とみなす考えを「**多文化主義**(multiculturalism)」と言っています。

「同化」はたとえば、日本に住んでいる外国人や少数民族が自分の母語ではなく、共通語とされている日本語を話し、日本の習慣や価値観を身につけ、日本人と同じようになっていくことです。大きな(強い)集団から小さな(弱い)集団に対する「郷に入っては郷に従え」の考え方ですから、小さな集団は、本来もっていた文化や言語を失ったり、あるいは取り上げられたりするようになります。

一方、「多文化主義」は、少数民族や移民などの文化的アイデンティティを認める立場です。たとえばカナダでは、「民族や人種の多様性を尊重し、すべての人が平等に社会参加できるような国づくりを目指す」ことを目標に掲げ、1971年に世界で初めて「多文化主義政策」を導入しました。現在カナダには200を超える民族が暮らしており、日常的にさまざまな言語が使われ、40種類以上の言語で新聞や雑誌が発行されているそうです(外務省サイト)。一つの国でありながら、その中にさまざまな言語、文化、習慣が混在しているわけです。

### ●考えましょう 3

1. もしあなたの町に、違う都市や外国から多くの人が引っ越してきた場合、「同化」と「多文化主義」のどちらを望みますか。あるいは別の方法を望みますか。理由も考えてください。

同化 / 多文化主義 / [別の方法]

[理由]

2. 自分が異文化で生活する場合、「同化」と「多文化主義」のどちらを望みますか。あるいは別の方法を望みますか。それはどうしてでしょうか。

同化 / 多文化主義 / [別の方法]

[理由]

3. 「同化」と「多文化主義」を社会に取り入れた場合のそれぞれのよい点、よくない点について考えてみましょう。

|             | よい点 | よくない点 |
|-------------|-----|-------|
| 同化が進んだ場合    |     |       |
| 多文化主義が進んだ場合 |     |       |

衝突を未然に防ぐため、また相手を不快にさせないために異文化間ソーシャルスキルを知っておくことは有効でしょう。ですがそれにとらわれすぎるのではなく、選択肢の一つとして使えるとよいのではないかと思います。どのようなコミュニケーションが望ましいのか、その正解は一つではないからです。

## ●まとめ

この章で考えたことや気づいたことをメモし、自分のまとめも書いておきましょう。

## ●参考文献・サイト

岡本耕平(2010)「多文化共生をめぐるいくつかのキーワードと日本の状況」『中部圏研究』No.171, pp.19-24, 中部圏社会経済研究所.

佐藤正二・相川充(編)(2005)『実践！ソーシャルスキル教育 小学校—対人関係能力を育てる授業の最前線』図書文化社.

高濱愛・田中恭子(2012)「米国留学前ソーシャルスキル学習セッション受講生の留学生活—対人行動と対人関係を中心に」『異文化コミュニケーション研究』第24号, pp.41-63, 神田外語大学.

中西晃(1989)『中・高校生国際感覚に関する研究報告書—青少年時代の異文化体験が人格形成に及ぼす影響』東京学芸大学海外子女教育センター.

外務省「わかる！国際情勢」Vol.38, 「多文化主義と多国間主義の国, カナダ」.

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/press/pr/wakaru/topics/vol38/index.html> (2018年7月3日確認)